

84人死亡・不明の大川小、三回忌法要 喪失感抱え

2013/3/4付 | 日本経済新聞 朝刊

東日本大震災の津波で児童と教職員計84人が死亡・行方不明となった宮城県石巻市立大川小学校の三回忌の合同法要が3日、同市内の斎場で営まれた。2年生の長男を失った父は今も埋めがたい喪失感を抱えたまま。犠牲になった同小教諭の妻はこの日に先駆け、夫が担任していた児童の家庭を初めて弔問した。

この日午後2時半に始まった法要には、遺族や学校関係者ら300人以上が参列。千羽鶴を手に来場する人もいた。

参列した遺族らによると、校章をかたどった花が祭壇に飾られた。地震発生時刻の午後2時46分に合わせて全員で黙とう。6年生の次女、みずほさん（当時12）を亡くした佐藤敏郎さん（49）は遺族を代表し「悲しみは消えないが、皆様に支えられ、少しずつでも進んでいきたい」と述べた。

■小2男児の遺族「空白埋まらない」 思い出の釣りに涙

石巻市の会社員、佐藤伸也さん（40）は大川小2年だった長男、来旺（らいお）君（当時8）を亡くした。名前通り、好

奇心旺盛だった息子。
父の心にはぽっかりと
穴が空いたままだ。

昆虫、ドジョウ、ザリ
ガニ……。生前、来旺
君は近所の山や沢を駆
け回った。捕虫網を持
って登校し、長靴を履
いても中まで泥だらけ
で帰った。



津波で亡くなった佐藤来旺君の釣りざおを手にする功基君と伸也さん（1日、宮城県石巻市）

釣り好きの佐藤さんの影響で2歳で釣りを始めた来旺君。震災直前の一昨年2月、親子は岸壁で根魚を狙った。「パパのような釣りがしたい」。息子に請われ、さおの操作を手ほどきした。「息子であり友人だった」。

来旺君を失い、海に向かう気になれなかったが昨年1月、弟らに連れられ釣りを再開。しかし、釣り糸をたれると親子で釣果を競った思い出が巡る。「なんで隣にいないんだ」。釣り上げた瞬間、涙が出た。

だが立ち止まっているわけにいかない。「つらさばかり見せてもこの子がかわいそう」。そう言って、わんぱく盛りの次男、功基君（4）を見つめた。いつか「3人」で釣りに行く日を夢見る。

■死亡教諭の妻、犠牲の児童宅弔問 「少し勇気出せた」

「少しだけ勇気を出せた」。大川小で亡くなった佐々木孝教諭（当時37）の妻、かおりさん（39）は2月、孝さんが担任していたクラスで犠牲になった児童の家庭に震災後初めて連絡を取った。13人の遺族が訪問を受け入れ、かおりさんは霊前に手を合わせた。

かおりさん自身も石巻市の中学校の教員。「犠牲になった児童への責任を考えると、夫の死をストレートに悲しめない」。負い目を感じ、職場での何気ない会話で笑うことすらためらう日々。「このままではいけない」と思いつつ、遺族と向き合えなかった。

三回忌を前に、気持ちを奮い立たせて始めた訪問。玄関に立つたびに体がこわばったが、多くの家庭で「来てもらって心が少し軽くなりました」と温かい言葉を受けた。「孝先生に」と子供の仏壇から供花や菓子を分けてくれた家族もいた。

「もっと早く行くべきだった。2年もたってしまい、遅すぎたと思う」と悔やむ。

まだ訪問を受け入れられない家族もいるが「少しずつでも皆さんの気持ちに近づけたら」と願っている。

▼**石巻市立大川小学校** 海岸から約5キロにあり、東日本大震災の発生から約50分後、津波に襲われた。市教育委員会などによると、津波の直前まで児童らは学校の敷地内に待機していた。保護者からの要望に応じ、国の主導で事故検証委員会が発足。年内に報告を取りまとめる方針。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.